

国文学研究資料館特別コレクション・山鹿文庫蔵『武教全書』考

中嶋 英介

はじめに

近世の兵学史研究は石岡久夫氏による各流派に目を向けた基礎的情報の提示から^①、やや停滞気味であったが、九〇年代以降若尾政希氏による兵学と政治思想的考察をはじめとして、多角的な研究が進んだ^②。前田勉氏が唱えた近世兵学の勃興をめぐる一連の考察や^③、個々の兵学でいえば田井健太郎氏による『兵法秘伝書』・『甲陽軍鑑』上の武芸内実の検討^④、さらに森曉子氏は北条流兵学者の祖、北条氏長の『兵法問答』と『甲陽軍鑑』・『豆相記』との記述を比較し、後北条家側の活躍を際立たせた意図的な執筆を明らかにした^⑤。高橋禎雄氏は北条氏長の弟子、

松宮観山『士鑑用法口訣』、同じく北條流兵学者の小倉圭斎『士鑑用法口訣』を取り上げ、両書における「道」解釈の展開を分析する^⑥。

政治史との関連であれば、戴文捷氏は山鹿流兵学の大星伝解説、及び山鹿流兵学と津輕藩藩主津輕信政による藩政との関わりを検討した^⑦。また、谷口眞子氏は津輕藩内の山鹿流兵学の受容形態を津輕藩士添田儀左衛門による「添田儀左衛門日記」や年譜から分析したほか^⑧、素行著の弟子、磯谷十介による注釈書『武教全書』（貴田親豊頭注）・『武教全書益習』を取り上げ、その統制論を明らかにしている^⑨。倉員正江氏は会津藩兵学者伊南芳通（一六二七～一七一七）の『統太平記』を取り上げ、軍書上の人物批評から同時代の政道批判にまで踏み込んだとす

る⁽¹⁰⁾。近世兵学思想の系譜や個々の流派に対する検討は、多角的に進みつつある。

一方で、これらの研究を補完する基礎的文献の活字化や情報共有は途上にある。近年では井上泰至氏が取り上げた兵学者の系図『兵家系図』の考察⁽¹¹⁾や近世に刊行された軍書の網羅によって兵学の諸流派の展開・軍書の内実がようやく突き止めやすくなった⁽¹²⁾。ただし本格的な翻刻であれば、甲州流・越後流・北条流・長沼流・山鹿流・諸流派兵学の基礎的文献を盛り込んだ『日本兵法全集』全七卷（人物往来社、一九六七〜六八）以来、白井純氏による『兵要録』の校訂研究などをのぞいて⁽¹³⁾情報発信については課題を残す。この背景は前掲の井上氏による系図紹介が物語るように、膨大なる兵学流派が生まれ、基礎的文献となる兵学書が数多い現状によるものだろう。『日本兵法全集』には甲州流兵学の『甲陽軍鑑』、北条流兵学の『土鑑用法』、長沼流兵学の『兵要録』など、それぞれ根幹となる史料翻刻や系譜・関連書が収載されている。ただし関連書の収載は一部提示にとどまり、基本的な書誌情報や新史料については数多くの課題を残す。本稿で扱う山鹿流兵学の基礎文献『武教全書』（万治元（一

六五八）年清書。全五卷八冊本〔附属書『武教小学』を除く（自筆本なし）も、その一例である。

山鹿素行（一六二二〜八五）の『武教全書』は成立から素行の晩年に至るまで兵学講義に用いた兵学書である。その内容は武士教訓から陣形・城攻・城築など戦時の教え等を盛り込み、万延元（一八六〇）年には窪田清音（一七九一〜一八六七）校訂のもとで出版に至った。ただし素行は一部を除いて解説を付せず、ほとんどが項目の明記にとどまるため、後世多くの注釈書が成立した。その広がりには素行の子孫が仕えた津軽・平戸藩のみならず、八戸から大村に至るまで注釈書が現存する。著者は前掲にて全国に散逸する『武教全書』の注釈書を調査し、山鹿素水・窪田清音等、幕末維新期における山鹿流兵学の流れを汲んだ注釈書が一定の量を占めた点、さらに注釈書の内容自体も地域によって多様である事実を明らかにした⁽¹⁴⁾。一方、国文学研究資料館特別コレクション山鹿文庫蔵の『武教全書』及び注釈書は突出して数が多いため、次なる課題とせざるを得なかった。本稿では山鹿文庫蔵『武教全書』、及び注釈書を提示し、その特質について検討する。

一、山鹿文庫と『武教全書』

山鹿文庫は兵学者山鹿素行の住居、積徳堂（浅草田原町）蔵の旧蔵書を含む平戸山鹿家旧蔵の資料群である。¹⁵⁾ 一三〇〇以上にものぼる山鹿文庫のリストは『山鹿家積徳堂文庫目録稿』全三巻（A・B 第一・B 第二、国文学研究資料館、二〇二〇）、重要文化財指定資料は『山鹿素行著述稿本類指定目録』（文化庁文化財保護部美術工芸課、一九八一）、さらに追加委託分資料に分かれている。これらを統合したリストは『報告書』国文学研究資料館特別コレクション山鹿文庫目録』として、二〇二二年六月現在、国文学研究資料館上の HP にてダウンロード可能である。以上の目録稿・データベースを用いて山鹿文庫蔵の『武教全書』及び関連書を調べた結果、全九七種の現存が確認できた。これらの書誌情報は本稿最後に「表」国文学研究資料館特別コレクション山鹿文庫蔵『武教全書』注釈書一覧』として示したので、そちらを参照願いたい。

全九七種の『武教全書』及び関連書の中で年代が判明

している史料を見渡すと、天和二（一六八二）年成立（ただし明和四（一七六七）年写）の『全書聞書』（A449）、享保八（一七二三）年以降写とされる『武教全書聞書』（B2）を除き、『武教全書 戦法』（A480）の寛延四（一七五二）年から『武教全書主本三ヶ条聞書』（A490）の明治元（一八六八）年に至るまで、大半が一八〜一九世紀半ばを占める。¹⁶⁾ 素行の孫、山鹿高道（一六九一〜一七六四）が平戸へ転居したのは延享元（一七四四）年のため、山鹿文庫蔵『武教全書』及び関連書は、主に平戸藩内成立の史料であることがわかる。冊数が最も多いのは『武教全書 正房伝』（A454）の一四冊本、『武教全書聞書』（A452）七冊本が続く。ただしいずれも一部欠本であり、全巻揃った注釈書はみられない。

『武教全書』とのみ銘打たれた書は一一種あり版本はなし。このうち A316・A467・B438・B446・B472・B478 の六種は項目に解説が付された注釈書、二種は項目のみの『武教全書』、一種は『武教小学』であった。残りの二種は閲覧不可にしても、山鹿文庫内で『武教全書』の原著は少なく関連書が目立つ。ここで「関連書」とするのは『武教全書』の漢文箇所を抜き出した『全書漢文抜粹』

(A453) や『武教小学』の項目を抜粋した『武教小学抜書』(A318) など、解説を目的としない抄録も現存する事情による。また、『全書関係ノ類』(B11)のように、判別不明の異本と一部項目の注釈を含めた例もみられる。

こうした異本との合本のほか、一部の項目に絞った注釈書も多い。例えば『侍用武功武教全書師伝』(A266)・『侍用武功之内問答』(A498)・『武教全書聞書侍用武功』(A473) は、巻一下「侍用武功」に注釈を付した書であり、いずれも内容が異なる。『侍用武功 武教全書師伝』

・『武教全書聞書侍用武功』は散逸の一部である可能性もあるが、閲覧の結果『侍用武功之内問答』は「侍用武功」のみに焦点をあてた注釈書であった。「侍用武功」は下層武士である「侍」を率いる大将、及び「侍」自体に向けた教訓であり、項目を一部切り取ることで武士教育を見据えた指南書の機能を果たしたのだろう。一部項目に特化して注釈書を作り出す傾向は山鹿文庫蔵に限らず、上市市立図書館増戸文庫蔵『侍用武功』(〇一〇一—一三六)・山口県文書館吉田家文書蔵『侍用武功篇四ヶ条』(吉田松陰関係資料三五〇)等(前掲拙稿参照)、各地でみられ

る。

このほか、巻三「城築」の項目「城築縄張武功秘伝之事」上の七ヶ条(「境目の城敵の攻るには攻にくく自然敵に攻とられたる時とりかへすに手間をとらざる事」・「小勢こもる城に大軍こもりても狭からず大軍のこもりたる城に小勢籠りても広からぬ取やうの事」・「ちぎりの曲尺の事」・「正の曲尺の事」・「重々曲尺の事」・「本有の曲尺の事」・「神心曲尺の事」)に注釈を施した『武教全書七ヶ条秘伝聞書』(B27)・『城築秘伝書留清書本』(B35) など、小項目に絞った書も多数現存する。

多彩である一方、注釈に統一性を感じない『武教全書』の注釈書の中で、特に多い共通名称が『武教全書聞書』・『全書聞書』である。抄録を含めて全四八種にのぼる「聞書」は、栗皮表紙の装丁(A452)から仮綴じ横本(A478 など)、体裁や写本年代が異なる例もあり一様ではない。次節ではこの聞書の注釈を一部取り上げ、その内実をみる。

二、『武教全書聞書』の諸相

山鹿文庫内で「聞書」と銘打たれた注釈書のうち、解説が充実し現存冊数が多いのはA452『武教全書聞書』（七冊本。以下「A452聞書」と表記）であり、項目解説のほか他書の注釈も複数取り入れている。その一例を巻一上「主本」の一項目「大将三采幣の事」の注釈からみてみよう。『武教全書』原文は「大将三之采幣之事」の後に自陣を采配する上での三ヶ条「能人を知べき事」・「賞罰を明にする事」・「常に兵法をならはす事」の三項目を付している。

■ A452聞書

右ノ主ノ義ヲ本朝ニテハ大将ト唱ヘル、勿論異国ニテモ大将ノ号ハアレドモ、於本朝ハ都テ上ニ居テ衆ヲスベ、率ヒ従ヘラル、人ヲ指テ大将ト云、三ノ采幣ト云ハ、只今読タル処ノ三ヶ条也、大勢ヲ治ラル、処ニ於テハ、此三ヶ条ノ意味ヲ能ク御熟得ナサレ、大勢ヲ治メ使ル、処、丁度戦場ニテ采幣ヲ以テ大勢ノ進退自由ニ被致如ク、為大将方ハ此三ヶ条ヲ以テ常々何程ノ大勢ヲモ自由ニ居ナガラニシテ治メ使ハル、義也、夫故ニ是ヲ三ツノ采幣ト云、又一説ニ是ヲ三ヶ条トモ可出ケレドモ、軍旅ノ義ハアラハ二不

知様二物ニヨソヘテ教ヲ成ト云説モアレドモ、中々左様躰ノ義ニテアルマジ、必竟右ノ通り、采幣ハ兼テ重器ニテ大勢ノ死生ヲ争フ処ニ於テモ、采幣ヲ以テ、自由ニ進退ヲナス如ク大将ハ常々此三ヶ条ヲ采幣ト被致外ニ不出シテ、天下ノ大勢ヲモ自由ニ治メラル、義ナル故、大将三ノ采幣ト出ス事也

（中略）⁽¹⁾

座右曰、是ハ勘介武田信玄江初テ此三ヶ条ヲ教ヘシ故、信玄是ヲ常ニ工夫受用仕給故、兵法ヲ教ニ口ニスル也、大将ノ本ハ何ゾ、格ハ何ゾ、士卒ヲ引廻スハ何ゾ、色々在ルニ勘介名人ニテ千巻万巻ノ書モ不入、此三ヲ以テスル時ハ人ヲ使フ如ク諸ノ者付ク也、采ハ人数ヲ使二千三千大将ハ采ニテ使フ也、天下ノ仕置ヲナスハ一万ヤ、十万ノ衆ニテ無故、此三ツヲ以テ使フ故、采幣ト云、（傍線部は筆者による。以下同。二五丁裏く二六丁裏）

前半の注釈によれば①異国に「大将」の呼称はあるが、本朝（日本）では軍勢を従える者を「大将」とよぶ②大将として三ヶ条（「能人を知べき事」・「賞罰を明にする事」・「常に兵法をならはす事」）を会得すれば、多くの軍勢

を自在に扱える③三ヶ条を秘伝とする軍書もあるが、戦果を左右し多数の軍勢を率いる技術である以上、ここに「大将三の采幣」として示すという。この大意を踏まえ他史料をみると同趣旨の注釈が複数確認できる。以下は『武教全書聞書』(A469)・松浦史料博物館蔵『武教全書聞書』(番号：古文書V-1(イ)6の1-6)の注釈である。

■『武教全書聞書』(A469)

大将三之采幣之事

ト云ハ、於本朝右ノ主タル方ヲ指テ大将ト云義ナリ、勿論於異国モ大将ノ号ハアレドモ専本朝ニ於テハ大勢ヲヒキシタガヘラル、方ヲ指テ大将ト云義ナリ、三之采幣ト云ハ云ハ(ママ)唯今読処ノ三ヶ条ナリ、是ヲ采幣ト出スハ則此三ヶ条ヲ以テ大勢ヲ使治メラル、処、丁度采幣ヲ以テ大勢ヲ自由ニ使フ如クナクテ不成、夫故是ヲ三ノ采幣ト出ス、勿論又一説ニ是ヲ三ヶ条之事ト出シテモ相済シテドモ必竟軍書之義ハ事ヲ密シテ三之采幣ト出スト申説有リ、然レドモ全左様牀之義ニテ無シ、采幣之義ハ武器之内ニ於テモ至テ重器故於戦場大勢ノ死生ヲ争処ニ於テ進退指引致ス義ハ至テ重キ義ナリ、致セバ丁度此

三ヶ条之義采幣ヲ以テ自由ニ使ハル、如ク治メラレズシテ不成、(七丁裏ノ八丁表)

■松浦史料博物館蔵『武教全書聞書』

右ノ主タル方ヲ本朝ニテハ専大将ト云、勿論異国ニ於テモ大将ノ号ハ有ドモ、本朝ニテハ専主ノ義ヲ大将ト云、大将ハ文字之通り大ニヒキイルニテ天下ノ万民ヲ指從ユル処ノ一人ヲ指テ大将ト云、其大将タル方ノ第一御存ジ不被知シテ不成義三ツ有、然レバ此三ヶ条ヲ得ト御存シナクテ不成故ニ——ト出スハ必竟大勢ヲヒキヒ進退指引ヲ致ハ采幣也、仮令バ立処ニ命ヲ落ス危キ場ニ進メトアレバ進ム処、此采幣也、人ハ命程大節ナル物ハナケレドモ、其命モ下知ニ依テハ命ヲ落ス場ニ進ハ采也致セバ、今日人ヲ教ヘ仕フ処ニ至テ丁度其如ク大将ノ命ニ随ヒ事ヲナス処、戦場ニ於テ進退ヲ御自由ニ被成通り、此三ツノ誤ヲ御得心有テ人ヲ被遣時ハ其如クアル故、此名ヲ三ツノ采幣ト云、勿論軍旅ノ書ニハ其事ヲアラワサズ三ヶ条ヲ秘シテ三ツノ采幣ト云説モアリ、彼是采幣八大節ニ致ス故、此三ヶ条之卦ヲ第一御得心ナ

クシテ不成、(一〇丁裏〜一二丁表)

字面は異なるが両書とも A452 の論旨、すなわち異国との呼称比較、三ヶ条会得の必要性、秘伝のは非を説いた一連の流れは共通する。これら三書は平戸藩内成立の注釈書であり、①の異国の呼称を踏まえた解説は、A448・A487・A490 にもみられる文言である。

特に A487『武教全書聞書』の口伝者、本澤幽然(表 No46 参照)は山鹿流兵学者奥村好昌(一七三〇〜一八〇二)の弟子にあたり、天明五(一七八五)年に免許皆伝、山鹿高忠を補佐した山鹿流兵学者師範である。幽然の師、奥村好昌は山鹿高道の弟子筋にあたることから、平戸藩には山鹿高道―奥村好昌―本澤幽然―山鹿高忠という道統があり、件の文言は平戸の山鹿流兵学者の系譜を継いだ注釈ともいえるのである。

ただし、かかる注釈が全国に伝播されたわけではなく、A452 聞書と同様の文言は他地域にて現在確認できない。山鹿流兵学者の流れを汲む増戸家伝来の『武教全書聴聞書』(ママ)(上山市立図書館増戸文庫蔵、番号:〇〇一〇〇一七九)には①異国との呼称比較や③秘伝のは非等の記載はなかった。この点については他地域の注釈との詳

密な比較を必要とするが、提示を目的とする本稿では考察を避ける。

続いて A452 聞書の注釈後半部「座右曰……」に移ろう。この箇所は天和二(一六八二)年成立・明和四(一七六七)年写の『全書聞書』(A449。以降「天和聞書」と表記)と共通する。

○三ノ采幣 是勘介武田信玄始テ此三ヶ条ヲ教エシ故、信玄是ヲ常ニ工夫受用シタマフ也、故兵法ヲ教ニ口ニスル也、大将ノ本ハナニゾ、格ハナニゾ、士卒ヲ引マハスハナニゾト色々アルニ、勘介名人ニテ千卷万巻ノ書モイラズ、此三ヲ以テスル時ハ人ヲツカフゴトク諸ノ者ツク也、采^{サイ}ハ人数ヲツカフ、二千三千大将ハ采ニテツカハルベシ、天下ノ仕置ヲナスハ一万ヤ十万ノ衆ニテナキ故、此三ヲ以テツカフ故、三ノ采幣ト云、(五二丁裏〜五三丁表)

若干の文字異同はあるが、A452 聞書の「座右曰く」以降の箇所は天和聞書とほぼ共通し、『座右』の文言として引用している。素行の子、高基の『座右』は『武教全書』の諸項目を取り上げた素行存命時成立の注釈書であり、山鹿文庫に二冊現存する(A329・330)。これを閲覧

したところ、天和聞書は『座右』の扉にみえる「書之常置座右 天和二三月八日不可不措手 於浅草積徳堂之南窓」の文言があり、諸本の一つであることが判明した。

複数の諸本が現存する『座右』、さらにその文言がA452聞書で引用された事実は、高基の解説が本澤幽然の注釈とともに平戸藩内にて評価された証左ともいえよう。『武教全書』は平戸藩内一つをとっても、山鹿流兵学者のことで複数の解釈を生み出し広まっていたのである。

おわりに

幕末期の山鹿流兵学者、窪田清音（一七九一〜一八六六）の『武教全書正解』（原片仮名。一九世紀半ば成立。大村市歴史資料館蔵、M221-105）巻一は、弘化二（一八四五）年付にて兵学上の師である山鹿素水の附言を紹介している。

余積年旧門下に秘伝する解書を普く読得たれど、素行の的意は纔に千百を十一に存するのみにして、悉く後学の附会臆度なり、（中略）今此解説、諸家の伝ふる処と異なるが如くなるもの多し、学者是を以て

余が臆度と思ふコトなけれ、諸家に伝る処は、素行の的意とは大に違ふコト多し、是二百年來教習の間、的意は次第に沈淪し、後学の臆説は年々に茂くして、誤に誤を伝へ来れる也、此解は素行著作の書を以て証となれば、一も後人の臆説をとらざるなり、（八丁裏〜九丁表）

祖師の世代から約二世紀、『武教全書』には余多の注釈書があらわれた。しかし数多くの注釈書を紐解いても、いずれも素行の真意を伝えず牽強付会や誤写が重なり、臆説が年々広まる事態であるという。この『武教全書正解』が世に伝わる注釈と異なるのは、素行による著作の教意を伝えるためであるから、学ぶ者は惑わされてはならない、と。

素水による他書批判は何をもたらずか。注釈が「年々に茂る素水の嘆きは単なる批判だけでなく、それだけ軸に縛られない多様な説が生まれた現状をも示すだろう。事実、本稿で検討した平戸藩内の『武教全書聞書』の内容は『武教全書正解』と異なり、素水からみれば数ある「臆説」の一つに過ぎないのかもしれない。しかしA452聞書の存在が物語るように、素水が「臆説」と判断した

としても『武教全書聞書』の道統が平戸藩内で世代を越えて受け継がれたのは、紛れもない事実である。かかる道統を踏まえた内実の検討は、近世兵学の系譜をたどる上で必須となるだろう。

本稿では山鹿文庫蔵の『武教全書』及び関連書表の作成を通して『座右』の諸本を発見しただけでなく、一部の『武教全書聞書』検討を経て山鹿高基より続く系譜と、本澤幽然による注釈の伝播が確認できた。今後の課題、それは注釈書同士の本格的な比較作業である。前稿で明らかにしたとおり『武教全書』の注釈書は各地に点在する一方で、注釈書同士の関わりについては一部の指摘にとどまった。本稿で取り上げた山鹿文庫・松浦史料博物館蔵『武教全書聞書』はいずれも平戸藩内成立の注釈書だが、これらが他地域に与えた影響はあるのか。諸地域による解釈の違いや奥書の不明人物の検討をも踏まえた作業を今後の課題としつつ、稿を終える。

【付記】

引用史料は原則として通行のものに改め、適宜濁点等を加えた。

【注】

- (1) 石岡久夫『日本兵法史―兵法学の源流と展開』（雄山閣、一九七二）。
- (2) 若尾政希『「太平記読み」の時代―近世政治思想史の構想』（平凡社選書、一九九九）。
- (3) 前田勉『近世日本の儒学と兵学』（ぺりかん社、一九九六）。
- (4) 田井健太郎「兵法書にみられる中世武術の特性―甲州流兵法書『兵法秘傳書』『甲陽軍鑑』をもとに」（『身体運動文化研究』（二六、二〇一〇）。
- (5) 森曉子「北条氏長『兵法問答』の合戦語り」（『近世文芸』（一〇〇、二〇一四）。
- (6) 高橋禎雄「近世兵書における「道」解釈の転換―『土鑑用法』を中心として」（『日本思想史研究』四七、二〇一五）。
- (7) 戴文捷『近世日本思想における儒学・神道・兵学の関係』（一橋大学大学院社会学研究科博士論文、二〇〇八）。
- (8) 谷口眞子「津輕藩における山鹿流兵学の受容―一七世紀後半の軍事―」（『書物・出版と社会変容』一三、二〇一二）。

- (9) 谷口眞子「近世前期の兵学とは―文武・治乱をめぐる認識―」（『書物・出版と社会変容』一七、二〇一四）。
- (10) 倉員正江「兵学者伊南芳通と『続太平記狸首編』―通俗軍書に見る当代政治批判―」（『近世文藝』七〇、一九九九）。
- (11) 井上泰至「旧海軍兵学校蔵鷺見文庫『兵家系図』をめぐる」（井上泰至編『資料論がひらく軍記・合戦図の世界―理文融合型資料論と史学・文学の交差』（勉誠出版、二〇二二）所収。
- (12) 井上泰至「近世刊行軍書論」（笠間書院、二〇一四）。
- (13) 白井純「松本藩版『兵要録』（新典社研究叢書二六六『信州松本藩崇教館と多湖文庫』（新典社、二〇一五）第六章・「木曾の人、大脇自笑―末流の長沼流兵法家による『兵要録』本文校訂」（『地域ブランド研究』一一、二〇一六）。このほか影印の『校刻兵要録』（上坂氏顕彰会史料出版部、二〇〇三）参照。
- (14) 拙稿「山鹿素行『武教全書』注釈書考」（『書物・出版と社会変容』（二八、二〇二二）所収。なお拙稿発表後、新たな『武教全書』の注釈書をはじめ、谷口氏が取り上げた『武教全書益習』（弘前市立弘前図書館蔵）、さらに前稿紹介の注釈書に追加すべき情報など、追記事項がある

ことを明記しておく。

- (15) 山鹿文庫の資料群については寺島恒世「山鹿文庫」受贈に関わる表彰式について」（『国文研ニュース』三九、二〇一五）のほか拙編『報告書』国文学研究資料館特別コレクション山鹿文庫目録』解題参照。
- (16) なお『武教小学並武教全書総目録』（A317）は明暦二年と明記しているそうだが（閲覧不可のため著者未確認）、成立年代の書写だろう。
- (17) 中略箇所には「直伝聞書曰く」・「全論曰」・「古伝聞曰」と三書を引用した記載が見られる。「直伝聞書」は『武教全書 山鹿直伝』（赤穂市立歴史博物館）、「古伝聞」は『山本勘助流武教全書口伝聞書』（茨城県立歴史館高橋キヨ家文書）など共通名称の史料はあるが、いずれも異なる注釈であった。この点については現存の有無を含めて今後検討することとしたい。

【追記】

本稿はJSPS科研費、18K19956の助成を受けたものです。

【表】国文学研究資料館特別コレクション山鹿文庫蔵『武教全書』一覧

※『山鹿家積徳堂文庫目録稿』（全3巻〔A・B第一・B第二〕国文学研究資料館、2020）・『〈報告書〉国文学研究資料館特別コレクション山鹿文庫目録』（2019）を参考に作成。

No	リスト	通番号	書名	著者・筆写者	点数	年代	備考（寸法（縦×横cm）など）
1	A	311	武教全書		8冊		24.5×18.7。四ツ目綴じ。項目のみ。1:巻1上「自序」～「法令」。首題の頁に「武教全書」・「自序 序段…」と書かれた外題題簽が各一紙ずつ付属。2:巻1下「天官」～「用間」。首題の頁に「天官／地形…」と書かれた外題題簽が一紙付属。3:巻2「練陣」～「営法」。4:巻3「城築」。首題の頁に「武教全書 三」と書かれた外題題簽が一紙付属。5:巻4上「客戦」～「山戦」。「客戦 主戦…」と書かれた外題題簽が各一紙ずつ付属。6:巻4下「河戦」～「戦法」。「武教全書 四之下」と書かれた外題題簽が上部に付属。7:巻5「兵具」～「馬醫」「武教全書 大尾」と書かれた外題題簽が付属している。8:『武教小学』と『武教全書』の総目録。「武教全書 附」と書かれた外題題簽が上部に付されている。全揃の『武教全書』。8冊とも表裏に見返し剥離。その裏に表裏ともに金の卍文の型紙あり。2～6は途中で付箋（紺色）が貼られている。
2	A	313	武教全書		1冊		13.1×19.7。横本。項目のみの『武教全書』。装丁が半壊の状態。全体的に虫損あり。巻頭に自序「武教全書自序」とある。署名「后学山鹿平義臣肅」。巻末に「武教全書後序」とあり。署名「山鹿素行子」
3	A	316	武教全書		1冊		20.1×14.0。四ツ目綴じ。『武教全書』巻1上「城築」の注釈。項目の横に簡易の注釈あり。1丁裏に「△今ノ都平安城東ニ流水アリ…」、「△王代一覽云垂仁天皇ノ時…」、「△禮記曲禮行ナハ前朱雀…」の書込あり。
4	A	317	武教小学並武教全書惣目録		1冊	明暦2 (1656) 年	閲覧不可。巻頭「武教小学序」。明暦2年素行門弟の原序あり。
5	A	318	武教小学抜書		1冊		下部の虫損が激しい。『武教小学』の抜抄。
6	A	329	座右	山鹿高基	1冊	天和2 (1682) 年	23.3×16.9。四ツ目綴じ。本文冒頭「天和二 三月十日 酒井主税殿」ではじまる。他の座右と異なり、扉の文はない。書写年代不明。次項参照。
7	A	330	座右	西俊康写	1冊	天和2 (1682) 年	25.5×17.7。四ツ目綴じ。扉に「書之以常置座右 天和二 三月八日不可不措乎 於浅草積徳堂之南窓」の文言あり。『武教全書』の目次の後で、一部注釈をまじえる。奥書「西藤俊康謹写之（印）」。山鹿文庫には西俊康筆の『聖教要録』が現存するほか、『西俊康覚書』あり。
Aリスト未収録資料							
8	1164	347	相伍益習 全書主本	山鹿高基	1冊	18世紀初 頭か	22.6×16.9。四ツ目綴じ。高基筆。題簽「相屋益習 全書主本」の「屋」の横に朱字で「伍」の訂正あり。『武教全書』の注釈書。項目に対する解説を付している。21丁目から『武教全書益習』の挿入あり。
9	1255	445	武教全書講集		4冊		25.4×17.4。仮綴じ。『武教全書』の注釈書。元亨利貞の4巻本。表紙『武教全書講集』の下に「素行」の名あり。元:巻1上「主本」～下「用間」、亨:巻2「練陣」～巻3「城築」、利:巻4上「客戦」～「山戦」、貞:巻4下「河戦」～「戦法」の注釈。

No	リスト	通番号	書名	著者・筆写者	点数	年代	備考（寸法（縦×横cm）など）
10	1256	446	武教全書後序	奥村好昌	5冊	明和5 (1768) 年奥書	11.6×32.5。横本、仮綴じ。奥村好昌（1730～1802）は通称仁右衛門、嶋雲とも称した。平戸藩士で山鹿高道の弟子。高道没後、幼年時の山鹿高忠、本澤幽然に兵学を教えた。『平戸之光』29（1938）参照。著作に『武教全書後序』のほか『塵塚』など。いずれも山鹿文庫蔵。1:『武教全書』跋文の注釈。表紙「明和貳年西六郎右衛門俊恒/奥村好昌講説」。西六郎右衛門は『増補藩臣譜略』（全24冊23巻、松浦史料博物館蔵。番号：古文書IV-1 5の3）に記載されているが「俊恒」の名は見当たらない。西家は代々平戸藩に仕えたが、寛政9（1797）年に断絶。奥書「右此間書并元氏ヨリ致借用写置者也、且不許他見死後必火中/明和五年戊子正月十五日写」。2:巻4下「雑戦」「小せり合に深働いたし引様武功の事」～「死地の兵へつくべからざる事」・「雑戦」同項目～「引取べき道筋にほうしをさしかねて可心付事」の注釈。3:巻4上「歩戦」、4:巻4上「騎戦」の注釈、5:巻4下「夜守」の「一、夜軍しかけられざるおくいの事」までの注釈。
11	1257	447	全書間書	奥村好昌	2冊	明和3 (1766) 年	25.9×18.1。四ツ目綴じ。1:表紙にマジック書きで「全書間書」。巻1上「自序」～巻3「城築」、2:巻4上「客戦」～巻4下「戦法」の注釈。奥書に「明和三年 奥村好昌」。
12	1258	448	全書間書		1冊		25.8×17.9。四ツ目綴じ。青表紙。表紙にマジック書きで「全書間書」。1丁目表に「奥村孝昌謹誌」とあり。巻1上「自序」～巻1下「斥候」上の項目「視觀察」までの注釈。
13	1259	449	全書間書（坐右）	奥村好昌写	1冊	天和2 (1682) 年成立・明 和4 (1767) 年写	21×13.8。四ツ目綴じ。青表紙。表紙にマジック書きで「全書間書」。446・447・448のマジック書きは同じ筆跡。『武教全書』注釈の抜粋だが、前半部は異本。巻1上「序段」～1下「地形」の目次の後に「書之常置座右 天和二三月八日不可不措手 於浅草積徳堂之南窓」とあり。その後、巻1下「斥候」～「山戦」の目次へと続く。一部項目の下に丁数あり。ただし、丁数と項目は合致せず。『武教全書』の注釈が混じる。奥書「此書山鹿高基先生御自筆之■（虫喰）書物、愚謹而写之畢他ニ出ル之書ニアラズ/明和四丁亥中秋 後学 奥村好昌」。
14	1260	450	全書講義		1冊		26.3×18.5。四ツ目綴じ。他の青表紙『武教全書間書』とは別本。巻1上「序段」～「制法」の注釈。1丁表に積徳堂印あり。
15	1261	451	武教全書間書 天官		1冊		22.9×16.4。仮綴じ。表紙は「天官」。巻1下「天官」の注釈。
16	1262	452	武教全書間書		7冊		24.2×17.4。四ツ目綴じ。5は欠巻。栗色表紙。1:巻1上「自序」～「法令」、2:巻1下「天官」～「用間」、3:巻2「練陣」～「營法」（山鹿氏蔵の印あり。）、4:巻3「城築」、6:巻4上「守城」～「山戦」、7:巻4下「河戦」～「火戦」、8:巻4下「夜戦」～「雑戦」。奥書に「山鹿氏」の朱書あり。
17	1263	453	全書漢文抜粹		1冊		27.1×21.3。四ツ目綴じ。青表紙。題簽は『全書漢文抜粹 全』『武教全書』上の漢文を収載した書。1丁目表に積徳堂の印あり。
18	1264	454	武教全書正房伝	土肥実治	14冊		25.8×18。朝鮮綴じ。1:巻1上「撰将」～「武者分」の注釈。「序段」・「主本」は欠。2:巻1上「制法」～「撰功」、3:巻1上「内習」～「法令」、4:巻1下「天官」～「地形」、5:巻1下「斥候」（題簽あり）6:巻1下「侍用武功」の項目「科人足早に退行を打留ざるをしかる人有・・・」までの注釈。7:巻4上「客戦」、8:巻4上「主戦」～「攻城」、9:巻4上「守城」～「舟戦」、10:巻4上「歩戦」～「山戦」、11:巻4下「河戦」～「弁戦」、12:巻4下「伏戦」～「夜戦」、13:巻4下「夜守」～「雑戦」14:巻4下「戦法」。跋文「山鹿高忠門人/土肥虎五郎実治」。山鹿高忠は平戸山鹿家第6代にあたる。

No	リスト	通番号	書名	著者・筆写者	点数	年代	備考（寸法（縦×横cm）など）
19	1265	455	全書覚		1冊		閲覧不可。
20	1270	460	全書兵具天(地)聞書		2冊		21.0×15.9。四ツ目綴じ。巻5「兵具」の注釈。1丁目表に積徳堂印あり。題簽なし。天:表紙直書きで「全書兵具 天聞書」、地:天巻と同じく「全書兵具 地聞書」。中に題簽「武教全書兵具三」あり。
21	1271	461	全書兵具聞書	村尾純武	1冊	明和5 (1768) 年	23.1×15.9。四ツ目綴じ。青表紙。巻5「兵具」上の項目「切組の小屋十間分積の事」までの注釈。積徳堂の印あり。題簽「全書兵具 聞書 全」。1丁表「明和五戊子歳/武教全書兵具聞書/村尾純武」1丁裏「山鹿高武先生於宅 子五月廿五日ヨリ同六月廿日迄/五十の屋承る/種村高均先哲/奥村好昌先哲ヨリ伝写」
22	1272	462	全書兵具聞書		1冊		23.5×16.4。四ツ目綴じ。巻5「兵具」の注釈。積徳堂印あり。1丁目と最後の丁と本文は紙質が異なる。奥書「申九月/山鹿高道先生奉願之写ス者也」。山鹿高道は素行の孫。
23	1273	463	武教全書兵具聞書 完		1冊		27.1×20.2。四ツ目綴じ。巻5「兵具」の注釈。積徳堂印あり。
24	1274	464	武教全書明録		3冊		閲覧不可。
25	1275	465	武教全書聞書		1冊		25.3×18.1。四ツ目綴じ。青表紙。積徳堂印あり。後代のマジック書きで「武教全書聞書」。巻4下「河戦」～「雑戦」の注釈。虫損が激しい。
26	1276	466	武教全書聞書 練陣	熊沢正敬	1冊	弘化2 (1845) 年	26.0×18.4。四ツ目綴じ。巻2「練陣」の注釈。奥書「弘化二乙巳初春正月中旬写畢焉/積徳堂門人 白水堂主/熊澤藤正敬文友謹写」。表紙・裏表紙ともに虫損激しい。熊沢正敬は積徳堂門人。
27	1277	467	武教全書		1冊	弘化2 (1845) 年	24.4×17.2。朝鮮綴じ。『武教全書』巻4上「寡戦」～「騎戦」の注釈。奥書「弘化二年 五月上旬 原永胤蔵」
28	1278	468	武教全書 城築		1冊		閲覧不可。
29	1279	469	武教全書聞書	山鹿高元伝	4冊	1:天保12 (1841) 年 2:天保14 (1843) 年 3:天保14 (1843) 年 4:天保15 (1844) 年	23.4×16.5。四ツ目綴じ。袋綴本。1と2～4は別本。1:巻1上「自序」～「法令」までの注釈。1丁表に蔵書印あり。最終丁に「八月十四日 是迄写」。巻末「天保十二年/天保」。2:巻3「城築」の注釈。1丁表に「高元先生御伝 武教全書聞書巻之四」、巻末「紙数五十一枚/天保十四年正月廿二日ヨリ 天保十五年三月三日写終 積徳堂門人 廿 ○○○（墨で消されている）吉川氏謹書」。3:巻2「練陣」～「當法」の注釈。巻初に「高元先生御伝 武教全書聞書巻之四」、巻末に「紙数四十五枚/天保十三年八月廿三日ヨリ 天保十四年正月二十日写終/積徳堂門人 九 ○○○（墨で消されている）吉川氏謹書」2と3で巻順が逆なのは、旧番号にしたがったため。4:巻4下「河戦」～「火戦」の注釈。1丁表に「武教全書聞書巻之七」。巻末「紙数八十一枚/天保十五年六月廿七日ヨリ 天保十五年八月十二日写終 吉川氏謹書/積徳堂門人 廿」
30	1280	470	武教全書聞書		3冊		閲覧不可。
31	1281	471	武教全書聞書		1冊		閲覧不可。
32	1282	472	全書聞書行軍	山鹿高元	1冊		24.5×17.5。四ツ目綴じ。青表紙。積徳堂印あり。題簽「全書聞書 行軍」。巻2「行軍」・「當法」の注釈。1丁裏に山鹿高元の名あり。高元は平戸山鹿家第7代にあたる。
33	1283	473	武教全書聞書侍用武功		1冊		25.3×18.6。四ツ目綴じ。袋綴本。巻1下「侍用武功」・「用間」の注釈書。1丁表に積徳堂印あり。表紙に直書きマジックで「武教全書聞書 侍用武功」

No	リスト	通番号	書名	著者・筆写者	点数	年代	備考（寸法（縦×横cm）など）
34	1284	474	武教全書聞書大全 練陣		1冊		24.8×17.4。四ツ目綴じ。袋綴本。巻2「練陣」の注釈書。はじめの2丁は紙の大きさが異なるが、筆跡は同じ。1丁目に積徳堂印あり。『手鏡要録』の引用あり。
35	1287	477	直伝聞書雑録	西盛邦	1冊	慶応2(1866)年	26.5×20.4。仮綴じ。『武教全書』の雑録。項目の系統はみられない。奥書「慶応二年丙寅春店/命謹写之 西盛邦」
36	1288	478	武教全書聞書	山鹿高道伝・西俊之	3冊	1:宝暦5(1755)年 2:宝暦6(1756)年 3:宝暦6(1756)年	31.6×11.9。仮綴じ、横本。1:巻2「練陣」の注釈。表紙「宝暦五年 西角大夫俊之/武教全書練陣聞書 死後火中/十月吉日 山鹿高道先生御口伝」。奥書に「西角大夫俊之」及び山鹿氏の印あり。2:表紙「宝暦六丙子年/武教全書當法聞書 死後火中/正月吉日 山鹿高道先生御口伝 西角大夫俊之」。裏表紙「門人俊之/武教全書/山鹿高道先生 門人俊之」。巻2「當法」の注釈。3:表紙「宝暦丁巳七月日 西角大夫藤原俊之/武教全書（「書」は挿入の上、朱書き） ○練陣/山鹿高道御留守順請」。巻2「練陣」の注釈。
37	1289	479	武教全書聞書	山鹿高道講	1冊		38.6×13.8。仮綴じ、横本。表紙「山鹿高道先生御口講/武教全書聞書 天官 地形 斥候 侍用武功 用間/未十二月二十五日」。巻1下「天官」～「用間」の注釈。
38	1290	480	武教全書 戦法	山鹿高道伝	1冊	寛延4(1751)年	33.8×11.9。仮綴じ、横本。巻4下「戦法」の注釈。奥書「山鹿高道先生伝/武教全書/戦法/寛延四丁未春/種村氏」
39	1291	481	武教全書聞書 天官城		2冊	1:天明7(1787)年 2:天明6(1786)年	18.7×12.9。仮綴じ、横本。※リストには「481」が二つあるが、1つの封筒に2冊収載。1:表紙「天官/武教全書聞書」。巻1下「天官」、2:表紙「天明六年/武教全書 城築/山鹿氏」とあり。巻3「城築」の注釈。
40	1292	481	武教全書聞書 天官城築		1冊		34.2×12.5。上記参照。
41	1293	486	侍用武功 武教全書師伝	山鹿高道伝・種村高矩	1冊	安永7(1778)年	23.4×17.1。仮綴じ。巻1下「侍用武功」の注釈。表紙「侍用武功/武教全書師伝」。奥書「山鹿高道先生御口伝/種村高矩/安永七戌戌年十二月四日」
42	1294	482	武教全書聞書 城築	山鹿高元伝・種村要人	1冊	天保11(1840)年	34.7×13.1。仮綴じ。巻3「城築」～「小口品々之事」の注釈。表紙「天保庚子四月写之/武教全書聞書 城築/山鹿高元先生御伝/種村高重」種村高重は種村要人（～1851）。平戸藩家老。種村家は4代目宇兵衛のときに平戸藩藩主鎖信に迎えられ、代々重臣として松浦家に仕えた。要人は9代目にあたり、文化8（1811）年に家督を相続、進物役をつとめた。天保6（1835）年隠居。（家臣人名事典編集委員会編『三百藩家臣人名事典』（新人物往來社、1989）7巻参照。
43	1295	483	武教全書戦法聞書	山鹿高元伝・永田朝恩	1冊	文政7(1824)年	20.5×13.6。仮綴じ。巻4下「戦法」の注釈。表紙「文政七甲申年九月/武教全書戦法聞書/山鹿高元先生御伝」とあり。奥書「永田朝恩謹書」
44	1296	484	武教全書戦法聞書	山鹿義都伝	1冊	宝暦3(1753)年か	20.5×13.6。仮綴じ。巻4下「戦法」一部の注釈。表紙「山鹿義都先生御伝/戦法聞書」とあり。16～17丁の間に、おり込み資料2枚あり。山鹿義都は平戸藩で寺社奉行・家老を歴任した山鹿一学（素行の弟、平馬の孫）の嫡子。『兵法伝統録』（『山鹿素行全集 思想篇』15巻（岩波書店、1941）所収）参照。
45	1297	485	武教全書兵具聞書	山鹿高道	1冊	宝暦3(1753)年	21.1×13.7。仮綴じ。巻5「兵具」の注釈。表紙「武教全書 兵具聞書 全」。奥書「宝暦三癸酉年 奥村氏不審/山鹿高道先生御答/秀修謹書」。A-484と同種。

No	リスト	通番号	書名	著者・筆写者	点数	年代	備考（寸法（縦×横cm）など）
46	1298	487	武教全書聞書	本澤幽然伝・ 種村高重	1冊	天保 11(1840) 年	25.9×17.4。仮綴じ。巻1上「主本」の注釈。表紙「天保十一年六月十六日/武教全書聞書/種村隼之丞高重/本澤幽然先生術伝」。裏表紙「武教全書/種村氏」。本澤幽然（1764～1842）は山鹿流兵学者。奥村好昌に学び、天明5（1785）年に免許皆伝をうける。寛政12（1800）年には山鹿流兵学者師範を命じられ、山鹿高忠・高紹を補佐した。『平戸之光』37号（1939）参照。
47	1299	488	主戦聞書	種村高周	1冊	天保 8(1837)年	仮綴じ。巻4上「主戦」の注釈。奥書「天保八年/酉/三月吉日 種村高周/武教全書聞書主戦終」
48	1300	489	武教全書聞書	種村基周	1冊	天保 8(1837)年	35.0×12.8。仮綴じ。巻1下「天官」の注釈。表紙「天保八年/武教全書聞書/酉/二月吉日/種村源基周」
49	1301	490	武教全書主本三ヶ条聞書	山鹿高通	1冊	明治元 (1868)年	24.6×15.5。仮綴じ。巻1上「主本」の注釈。奥書「明治元己巳（ママ）正月七日夜 写之 高通」。高通は山鹿高通。
50	1302	491	武教全書戦法聞書	種村高重伝	1冊	元治 2(1865)年	27.1×19.7。仮綴じ。巻4下「戦法」の注釈。奥書「元治二年 丑四月写之 種村高重先生御口伝」
51	1303	492	武教全書聞書 自撰功至法令	種村高均	1冊	明和 4(1767)年	37.8×13.9。仮綴じ。横本。巻1上「撰功」～「法令」の項目「箴城法令之事」までの注釈。表紙「明和四年 丁亥 武教全書聞書 自撰功 至法令 十月十九日 種村源高均」
52	1304	493	武教全書戦法聞書	本澤幽然伝	1冊	天保 5(1834)年 写	27.3×18.3。仮綴じ。表紙「天保甲午夏 於積徳堂 武教全書戦法聞書 本澤幽然先生御伝」。表紙裏に片山兵衛義貴の名あり。巻4下「戦法」の注釈。内容は491と同じ。奥書「奥村長十郎写」。片山兵衛義貴は兵学者。山鹿高紹に弟子入りし、吉田松陰とともに山鹿流兵学を学んだ。加藤三吾『平戸しるべ』（平戸史談会、1916）参照。
53	1305	494	制法ノ巻ヨリ 高道先生		1冊	不明	26.3×18.3。仮綴じ。表紙・裏表紙は本文と紙質が異なる。巻1上「制法」の注釈。
54	1306	495	武教全書戦法聞書	長島権之助	1冊	宝暦 2(1752)年	13.1×17.9。仮綴じ。横本。巻4下「戦法」の注釈。491・493とは異なる。奥書「宝暦二壬申年九月 謹伝受す/文化九壬申五月廿五日 秘免/長島権之助敬正謹書」1丁目表・奥書に「長島」の印あり。文化9(1812)年写。
55	1307	496	武教全書 大尾		1冊		20.8×14.2。仮綴じ。名称は『武教全書 大尾 兵具并火器』。中身は『武教全書』上の項目を抄録したもの。
56	1308	497	武教全書自序序段主本		1冊		25.6×18.4。仮綴じに栗皮の表紙を被せ、四ツ目綴じにしている。巻1上「自序」～「主本」「万の本をさとする事」の注釈。奥書「山鹿本家」
57	1309	498	侍用武功三内問答	葉山長温・熊谷直方	1冊	文政 13(1830) 年	25.0×17.2。仮綴じ。巻1下「侍用武功」の問答書。表紙「侍用武功三内問答 葉山長温 熊谷直方」奥書「文政十三寅七月廿一日 夜調之」
Bリスト							
58	B-1	1	武教全書 聞書	山鹿高忠伝・ 塙長道	1冊	弘化 2(1845)年	25.2×17.2。仮綴じ。2冊の合本。1冊目は巻4上「客戦」の注釈。表紙なし。第2冊の表紙（17丁）に「弘化二<乙>/巳」年六冊 九冊之内/武教全書聞書{従主戦/守城迄}/山鹿高忠先生御伝 塙長道」とあり。ボール紙表紙（新補）付属。紙片2枚挟みこまれる。
59	B-1	2	武教全書 聞書		1冊	享保 8(1723)年 以後写	24.6×17.0。仮綴じ。巻4上「攻城」の項目「敵城に押よする作法の事」～「守城」上の項目「壮男社女を一所におかす人質の勤番を堅くする事」までの注釈。岩瀬氏伝の記載あり。ボール紙表紙付属。

No	リスト	通番号	書名	著者・筆写者	点数	年代	備考（寸法（縦×横cm）など）
60	Bー	3	武教全書 戦法聞書	奥村正徴	1冊	寛政 8(1796)年 写	12.8×18.0。仮綴じ、横本。巻末「素行先生戦法御伝葉山子ヨリ 借用写置者也/于時寛政八丙辰秋七月/十七日/奥村平六左衛門正徴 /秘蔵本」
61	Bー	4	武教全書及其他雑記		14 冊 + 4枚	江戸中期写	14.0×14.7。厚紙二枚で包む。マジック書きで「武教全書/其他雑 記/天祥院御筆」。3巻は仮綴じ、4巻は未装丁。それ以外は折本。 1～12は『武教全書』の項目と一部重なるが、異本。13は『兵法 神武雄略集』。14～15は『武教全書』の項目を抜粋し、適宜注釈 をいれている。1:升形本。「一匹夫功」で始まる。『武教要 録』の抜粋。2:『兵法神武雄略集』の抜粋。3:異本。4-1～4:も とは1冊か。異本。各所に貼り込みあり。5:異本。6:異本。切り離し あり。7:異本。各所に切り離しあり。8:異本。9:異本。10:異本。 11:『兵法神武雄略集』・「或問」の抜粋あり。『兵法或問』か。 12:異本。13:『兵法神武雄略集』・『兵法神武雄備集』の抜粋。 14:『武教全書』の項目抜粋。一部注釈あり。15:『武教全書』の 項目抜粋。一部注釈のほか朱書き訂正あり。
62	Bー	5	戦法聞書		1冊		21.6×13.6。閲覧不可。直書きで「戦法聞書」
63	Bー	6	武教全書聞書 残欠		1冊		17.0×12.0。仮綴じ。閲覧不可。『武教全書』巻4下の注釈書。
64	Bー	7	武教全書聞書		2冊		27.2×19.7。仮綴じ。1、2とも表紙はマジック書き。1:巻4「夜 戦」～「雑戦」の注釈。2:巻4「戦法」の注釈。
65	Bー	8	武教全書聞書 自客戦 至守城		1冊		23.3×16.4。四ツ目綴じ。表紙はマジック書き。青色表紙。巻4上 「客戦」～「守城」の注釈。
66	Bー	9	武教全書聞書		1冊		11.1×30.0。仮綴じ。封筒の表題は「戦法三戦之事」。巻4下「戦 法」の注釈。
67	Bー	10	会論記（全書聞書）		1冊		11.5×16.5。閲覧不可。斯道文庫調査記録によれば「高興講授武 教全書聞書」とある。
68	Bー	11	全書関係ノ類		6冊		27.0×18.5。1～4、6巻は仮綴じ、5巻未装丁。1:巻4上「客戦」～ 「主戦」の項目「陣付場」の注釈。2:「天文七年七月十九日辰之 刻より未之半迄乃合戦也」。異本。3:巻4「攻城」の注釈。「城中 に早く火の手をあぐべき事」まで。4:前半3丁の書名は不明。4丁 以降巻1上「序段」途中までの注釈。5:未装丁。巻4下「河戦」 ～「火戦」の注釈。書名は不明。6:異本。中に題簽「直伝聞 書」。8～9丁の間に別紙、14～15丁の間に城郭図あり。
69	Bー	13	天官私考		1冊		27.6×18.4。四ツ目綴じ。巻1下「天官」の注釈書。青色表紙。他 の青色表紙との関連は不明。16～17丁・32～33丁の間に漢文兵法 書の和文注釈を記した二枚折りの別紙あり。
70	Bー	24	客主戦		1冊	江戸中期か	16.5×11.4。四ツ目綴じ。巻4上「客戦」・「主戦」の注釈書。現 扉は原表紙（本文共紙）。原表紙は書き損じの紙を使用した ものと思われ、袋内に本文同筆の書き込み二行「三者は…」（墨 字）が見られる。
71	Bー	26	武教全書七簡〔ママ〕 条聞書	本澤幽然伝・ 鮎川左近右衛 門	1冊	天保 5(1834)年 写	13.1×36.1。仮綴じ、横本。巻3「城築」の項目「城築繩張武功秘 伝之事」上にあるセッケの注釈。表紙「天保五〔甲/午〕年四月七 日於積徳堂/武教全書七簡条聞書/本澤幽然先生御口伝」。奥書 「鮎川左近右衛門源朝典謹書」

No	リスト	通番号	書名	著者・筆写者	点数	年代	備考（寸法（縦×横cm）など）
72	Bー	27	武教全書七ヶ条秘伝聞書	澤村純一	1冊	安政2(1856)年 写	13.9×40.3。仮綴じ、横本。巻3「城築」の項目「城築縄張武功秘伝之事」上にある七ヶ条の注釈。ただし、内容は26とは異なる。表紙「安政二/武教全書七ヶ条秘伝聞書/卯三月五日 澤村純一」。奥書「田村文右衛門/坂本六之進/馬淵八郎左衛門/安藤居兵衛/天野勇衛/原半平/澤村兵内/右一同御伝有之」。奥書の人物はいずれも平戸藩士。『増補藩臣譜略』の情報を以下略記する。田村文右衛門は消防方のほか、安政6（1859）年郡奉行・勘定奉行を兼任した（巻5）。坂本六之進は勘定奉行・郡奉行を歴任。安政元（1854）年6月には海岸防御御調掛・長崎湊御用掛を勤めた（巻7）。馬淵八郎左衛門は中小姓頭。安政3（1856）年、山鹿高通の兵学講義に出席し、同6年には文武諸芸引立方懸に就任した（巻5）。安藤庄兵衛は大小姓・小納戸頭を経て、嘉永4（1851）年には中老嫡子格に就任（巻7）。万延元（1860）年2月には山鹿流兵学の講義に出席し、文久元年には沓岐に赴任した（巻7）。天野勇衛は句読師、兵学後見役を歴任後、文久元（1861）年には沓岐国郡代を勤めた（巻6）。原半平は安政元年より御山奉行、組目付を歴任（巻14）。澤村兵内は大小姓・中老嫡子格を経て天保13（1842）年に勘定奉行を勤めた（巻3）。
73	Bー	28	小学聞書		1冊		『武教小学』の注釈。
74	Bー	31	高基先生御口訳、未二有城築秘事清書本	奥村好昌筆	1冊	天明4(1784)年	14.2×20.6。横本。巻3「建築」の項目「城築縄張武功秘伝之事」の複数注釈を集約したか。順不同で途中から筆跡が異なる。表紙「高基先生御口訳未二有/城築秘事」。14丁表に「右七ヶ条の口授は已前の杉山雲八江都にて 高基公より伝来の書留なるべし/奥村好昌記之/天明四年甲辰稔」。
75	Bー	32	高基先生御直講 城取加根之伝稿本		1冊	享保11(1726)	14.2×20.5。仮綴じ。巻3「建築」の項目「城築縄張武功秘伝之事」の注釈。
76	Bー	34	城築縄張武功秘伝之事	山田一良	5枚	元禄12(1699)年	もとは1巻。紙高17.6cm、紙5枚。1枚ずつ巻いている。巻3「建築」の項目「城築縄張武功秘伝之事」の注釈。奥書「右御相伝之書並全書講集、去寅之江府回録御屋敷頼焼之節、依焼失其所持之書写之可指上旨、蒙御意則以自筆悉記之、以有浦発右衛門封印俣披露之也/元禄十二巳卯夏 山田久助一良」。
77	Bー	35	城築秘伝書留清書本	山鹿義甫伝・山鹿高賀写	1冊	明和3(1766)年	20.5×14.0。袋綴冊子本。巻3「建築」の項目「城築縄張武功秘伝之事」の注釈。1丁表に「磨愈堅」印あり。奥書「明和三 丙戌年九月十有一日/山鹿高賀 書之/山鹿義甫先生 御伝」。義甫は素行の弟平馬義行の子。兄清吉の養子となり、平戸山鹿平馬家第3代当主となる。高賀は平戸山鹿家第4代にあたる。
78	Bー	36	七ヶ条聞書（城築縄張武功秘伝之事）	山鹿高忠伝・西美行写	1冊	文化9(1812)年 奥書	21.1×13.4。仮綴じ。巻3「建築」の項目「城築縄張武功秘伝之事」の注釈。表紙左に「山鹿高 先生御傳」とあり。奥書「文化九年歳在壬申季春吉日/山鹿高忠先生門人/西美行/時先生御病氣二付小先生御代講僕武雄入湯之留守二付/帰省之上御伝書を以て御伝相済則写之畢」。
79	Bー	37	七ヶ条御伝聞書（城取縄張武功秘伝之事）	種村高重	1冊	天保11(1840)年	13.0×34.7。横本。巻3「建築」の項目「城築縄張武功秘伝之事」の注釈。表紙「天保十一庚子年/七ヶ条御伝聞書/八月十八日 種村高重」。奥書「六月五日/本澤淳之助/奥村長十郎/山鹿藤五郎/種村幸之丞」。
80	Bー	38	高道先生口授 城築縄張武功秘伝稿本	山鹿高道伝	1冊	宝暦6(1756)年 奥書	12.0×34.2。横本。巻3「建築」の項目「城築縄張武功秘伝之事」の注釈。表紙「高道先生口授/城築縄張武功秘伝/宝暦六丙子閏十一月月中旬」。奥書「宝暦六丙子閏十一月/十四日於東武/高道先生口授」。

No	リスト	通番号	書名	著者・筆写者	点数	年代	備考（寸法（縦×横cm）など）
81	Bー	39	城築縄張武功七ヶ条秘伝御口授扣清書本	奥村好昌伝・澤村末蔵筆	1冊	天明3(1783)年	14.2×41.0。横本。巻3「建築」の項目「城築縄張武功秘伝之事」の注釈。表紙「天明三年 澤村末蔵藤原純照/城築縄張武功七ヶ条秘伝御口授扣/卯六月朔日」。奥書「奥村先生御口授/酒井弥右衛門/出淵副兵衛/熊谷幸三郎/桑田槌三郎/澤村末蔵/ゞ/右一同二御伝在之」
82	Bー	40	七ヶ条秘伝聞書清書本	奥村正微	1冊		21.0×13.4。横本。巻3「建築」の項目「城築縄張武功秘伝之事」の注釈。奥書「山鹿高忠先生御伝 奥村正微」
83	Bー	41	山本勘介流（城築縄張武功秘伝秘事大事七ヶ条之口訣）	山鹿高道伝	1冊	宝暦6(1756)年	20.5×13.6。仮綴じ。巻3「建築」の項目「城築縄張武功秘伝之事」の注釈。途中11丁裏に「山鹿高道御相伝/于時宝暦六丙子年九月五日/門人/安藤氏/小城氏/奥村氏/服部氏」の書込あり。
84	Bー	42	城築縄張武功秘伝事	奥村好昌編	1冊	備考参照	20.8×14.0。四ツ目綴じ。3巻。巻3「建築」の項目「城築縄張武功秘伝之事」の注釈。三巻の注釈を一つにまとめている。1巻は宝暦6（1756）年5月本、2巻は延享5（1748）年本、3巻は宝暦6年9月本。奥書「右の御伝は殿方へ御相伝の節、出座仕り、右三輩集して如此/奥村好昌扣」
85	Bー	43	山本勘介流（城築縄張武功秘伝事大事七ヶ条之口訣）		1冊	天明3(1783)年	20.8×13.7。仮綴じ。巻3「建築」の項目「城築縄張武功秘伝之事」の注釈。
86	Bー	44	城築曲尺七ヶ条御伝（城築縄張武功秘伝之事）	長島元長写	1冊	文政3(1820)年	26.4×17.8。仮綴じ。巻3「建築」の項目「城築縄張武功秘伝之事」の注釈。奥書「文政三辰十一月廿七日伝受 長島元長謹写」。長島元長（1793～1871）は杵岐生まれの平戸藩士。文政5年家督を継ぎ、弘化2(1845)年には杵岐全島の押役となる。積徳堂の書庫である惟揚庫の書籍係をつとめたほか、藩主に軍学を進講した。
87	Bー	415	武教全書		2冊		25.6×20.2。閲覧不可。
88	Bー	417	武家全書				24.7×19.2。閲覧不可。虫損甚大。
89	Bー	420	武教全書		6帖	享保8(1723)年写	25.1×18.1。閲覧不可。藤原清倫写。明暦丙申秋、素行自序。素行自跋。門弟子序（武教小学）。1:表紙見返し裏に金地あり。途中頁に付箋が挟まっている。2:綴じ糸が解けている。6:虫損甚大。
90	Bー	430	武教全目録	山鹿義都	1冊	江戸後期	13.1×36.8。仮綴じ、横本。外題縦長。武教全書の目録と簡略な内容紹介。奥書「右全書目録/移属者也/山鹿義都」
91	Bー	432	客戦心得之事		1冊	江戸後期	9.3×23.5。仮綴じ、横本。巻4上「客戦」の項目「客戦心得之事」の注釈の他、巻1上「自序」・巻4下「戦法」の注釈もあるが、抄録。
92	Bー	438	武教全書巻四	舟木流水著・天野良平写	1冊	弘化2(1845)年奥書	23.4×17.0。四ツ目綴じ。題簽は「武教全書肩煎抄 巻之四」。舟木流水著。巻1下「天官」の注釈。奥書「弘化二年四月廿五日写終/天野良平」
93	Bー	446	武教全書		1冊	江戸後期写	13.3×17.7。折紙綴。題簽『武教全書自序後序聞書』巻1上の「自序」・巻5「後序」の注釈。後序の奥書には山鹿素行の名前のほか、「授与/同/義昌」とある。
94	Bー	472	武教全書		1冊	江戸後期写	24.4×17.4。仮綴じ。表紙直書き「武教満志開宗」。巻4上「客戦」～「歩戦」「馬上の敵・・・」の注釈。裏表紙見返しに「三冊之内天野氏蔵」

No	リスト	通番号	書名	著者・筆写者	点数	年代	備考（寸法（縦×横cm）など）
95	Bー	478	武教全書	山鹿高定	1冊	江戸後期写	13.0×18.7。仮綴じ、横本。藤忠之校正・門人藤可慶句読。序「武教小学序、明暦丙申八月門弟子等謹序題」跋末「山鹿高定記之」。山鹿高定（1748～1762）は高基の子。平戸藩に仕えた高道の弟。『兵法伝統録』参照。
96	Bー	478	武教全書六		1冊	不明	20.4×14.0。仮綴じ。巻5「兵具」～「急療」の注釈書。後序の後に「同義昌」とあり。
97	Bー	479-2	武教全書間書		3冊	江戸後期写 か	12.3×32.7。仮綴じ。虫損甚大。1:479-2-1:巻4下「火戦」の注釈書。以降は未装丁もしくは紐が解けている。479-2-2:不明（巻4下「夜戦」か）～「雑戦」の項目「大軍のくり引・・・」までの注釈書。以降は未装丁の『武教全書』の注釈だが、詳細不明。2:『武教全書』の注釈。虫損甚大。3:別本の『ト筮盲節』